

「大蛇」について ②

おやさと研究所教授
佐藤 孝則 Takanori Sato

『天理教教典』「第四章 天理王命」に、「をもたりのみこと」は「人間身の内のぬくみ、世界では火の守護の理。」とある。そしてそのお姿は「大蛇」であり、日様、お天道様とも教えられている。

この世界において、^{ぬく}温み・暖かみがなければ、生きとし生けるものは生き長らえることはできない。また人間社会でも、温み・暖かみがなければ、互いに立て合い、助け合う信頼関係は成り立たない。「大蛇」は、そのような人と人との関係の基本にある温み・暖かみを、この世界に与え続け、私たちをいつまでも守護してくれているのである。

神話の中の「大蛇」

寺島良安著『和漢三才図会』の「巨蟒（やまかがち / おろち）」の項に、著者による解説文が記載されている。その中に、出雲国の簸川上に頭部と尾部がそれぞれ八つに分かれ、^{はおずき}酸漿のような赤い目をした大蛇がおり、人間をよく呑み込んでいた。そこで素盞鳴尊がその大蛇を退治したところ、大蛇の尾の中から^{あめのむらくも}「天叢雲の剣」、すなわち三種の神器の一つである「草薙の剣」一振りが見えた。その「草薙の剣」を身体に収めていたのは、「八岐大蛇」という大蛇だった、という神話がある。

大蛇が人間を丸飲みにする事件は、日本では確認されていないが、大蛇が棲む熱帯地域では時々起きている。2017年3月26日、インドネシアのスラウェシ島のサルピロ村に住む25歳の青年が、パーム油のプランテーションで働いていたところ、とつぜん行方不明になった。数日後、近くにいた大型のアミメニシキヘビに呑み込まれていたのが確認され、地域の人たちを震え上がらせた。その大蛇の腹を割いた時、青年はすでに死亡していたという。たいへん痛ましい事件である。

今日の日本では、人がヘビに呑み込まれるような事態が起これば大ニュースになるのは必至だが、^{いにしえ}古のころは、人が大蛇に呑み込まれることよりも、素盞鳴尊が大蛇の尾の中から「草薙の剣」を見出したことの方が、むしろ重要だったのかもしれない。この神話の意図は、八岐大蛇が「草薙の剣」を身体に収めていたという事実であり、神性をもった大蛇だったことを強調することではなかっただろうか。

いずれにおいても、日本では大蛇でなくても、ふつうのヘビが神性視されることは、民間信仰ではよくあることである。

民間信仰における「蛇神」

奈良県内のあちこちで、豊作祈願の「野神まつり」が今も伝承されている。たとえば、子どもたちが藁でつくった「ジャ(蛇)」と称するものを担いで村々を巡り、最後に水田の一面に鎮座する小祠に到着し、「ジャ」を近くの木の幹に巻き付けて終了する行事である。

この祭りは、収穫間近の田んぼにやってきては頭を垂れる稲穂を食べようとするスズメなどの“害鳥”を、好んで捕食してくれるヘビに対する感謝と畏敬を表す神事である。このときの「ジャ」は、おそらく水田域で活動するシマヘビとヤマカガシを想定していたと考えている。このような神事は、奈良県内のあちこちに残されており、天理市内では南六条町、平等坊町、岩室町、新泉町などで今も伝承されている。

また、収穫後のお米の貯蔵・管理でも悩まされていた。とりわけ、「米蔵」の床下や地面を^{すみか}住処とするハツカネズミや、天井裏を我が者顔で走り回るクマネズミは、貴重なお米を食べる“害獣”“厄介者”だった。ただ、これらのネズミを好んで捕食するヘビがいることも、幸運だった。それはアオダイショウである。

昔から、どこの家にも“ヌシ”と呼ばれる大きなアオダイショウが棲んでおり、人間には危害を加えないが、ネズミを捕食してくれるなど、人間とヘビとのより良い関係ができ



天理市川原城町に置かれた「八王子神」の石碑。とくに農業関係者にとっては、“害獣”からお米を守ってくださる神様の存在であることから、感謝と畏怖を込めた信仰対象としての石碑や小祠がつけられるようになった。祀る対象は「八王子神」である(写真)。天理市内の蔵之庄町、川原城町、勾田町などでは“^{はつおじ}八王子さん”と呼ばれ、今も親しまれている。

一方、『常陸国風土記』に記載されている「夜刀の神」がニホンマムシ(通称、マムシ)を意味することは、広く知られているところである。天理市乙木町の「山の辺の道」沿いに、夜都伎神社が鎮座している。「乙木」は「夜都伎」が語源ではないかと類推するが、その「夜都伎」の「夜都」は、「夜刀」と同義語で、「やと」、「やつ」、「谷戸」、「谷地」と同義ではないかと考えている。今でも、「谷戸」「谷地」というのは湿地場所を意味し、水田に適した場所になっている。それゆえ、昔からそのような場所は、水田として開墾され、利用されてきた場所である。また、そのような場所は、マムシが生息する場所であり、マムシが好んで捕食する小魚、カエルなどの動物たちもたくさん生息するところでもある。

マムシはなぜ「夜刀の神」になりえたのか。

本州に棲むヘビで最も恐れられるのはマムシである。全長50～60cmほどで体はずんぐりし、日本刀の刃渡りとほぼ同じである。夏季は強烈な日差しを避けるため夜間に活動し、夜、田んぼの畦道を歩くとそこにはマムシが横たわり、知らずに踏みつけることがある。マムシに咬まれると瞬時に痛みを感じ、その咬傷部からは血が滲み出てくる。まさに、夜に“刀”で切られた状態になり、患部に入った毒量が多いときは重症を負うことになる。

古より、米は日本人の主食であり、そのお米が生産される水田は神聖な場所である。近畿地方の多くの神社に残されている「御田植え」神事は、神職が一連の田植えの所作を祭事として執り行う神聖な行事である。その神聖な田んぼを収穫・貯蔵まで守護するヘビの存在は、極めて大きい。その守り神として、マムシやアオダイショウ、シマヘビ、ヤマカガシが畏敬の対象になったことは、自然な成りゆきではないかと考える。

「大蛇」でなくても、一般的なヘビは、昔から畏敬の対象として、大きな存在感があったのではないだろうか。